

内海 五郎兵衛 — 命と生活の架け橋をつくる —

今から百五十年ほど前、石巻を流れる北上川には、橋は一つもありませんでした。当時、石巻には、住吉や袋谷内（現在の水明町）など四か所に渡し場があり、渡し舟が村と村を結ぶ役目を果たしていました。人や物の往来は、大雨や洪水になると制限され、人々は不便な生活をせざるをえませんでした。

五郎兵衛は、天保十二（一八四二）年、牡鹿郡水沼村（現在の石巻市）で農業を営む片岡与七の長男として生まれました。五郎兵衛は小さいころから働き者で、心に決めたことは最後までやり通すねばり強い子どもでした。五郎兵衛は、病気の父親をもつ友達がいたら、近くの川で魚をとって売ったり夜遅くまでわらじ作りを手伝ったりして、困っている友達を助けることもありました。

五郎兵衛が二十四歳のとき、突然、父が重い病気にかかってしまいました。

そのころ、五郎兵衛が住む村には医者がいまいませんでしたので、このようなきは遠くの石巻村から医者を呼ばなければなりません。

「すぐに医者を呼んでくるから、待っていてくれ。父ちゃん。」

と言うなり、五郎兵衛は暴風雨の中、川沿いの渡し場に馬を走らせました。ようやく渡し場にたどり着いた五郎兵衛の目に映ったのは、数日前から降り続く雨のために、荒れ狂う北上川でした。何とか舟を出してもらいたい一心で、川沿いの渡し舟の船頭の家を訪ねてお願いしました。しかし、舟が出せるような状態ではありませんでした。



父のことが心配でならなかったのですが、しかたなく五郎兵衛は知り合いの家で一夜を明かし、川の流れがゆるやかになるのを待ちました。ところが次の日も、北上川の様子は変わっていませんでした。むしろ前日より水かさも勢いも増していてどうしようもない状態でした。五郎兵衛は、目と鼻の先にある石巻村がこんなにも遠いのかという思いと、何もできない自分に対する悔しさでいっぱいになりながら、急いで家にもどりました。

そんな五郎兵衛を待っていたのは、父の死でした。

「すまない、父ちゃん。ちきしょう、ちきしょう。」

五郎兵衛は、布団に横たわる父の姿をじっと見つめ、涙を流しながら、何度も何度も畳にこぶしを打ちつけました。

それからというもの、五郎兵衛は何とかがして北上川に橋をかけたいという思いで、一生懸命働きました。そのかわら、橋を作るための法律や建築などの勉強もしました。わからないことがあると、専門家に聞きに行くこともありました。

一つ大きな問題がありました。橋を作るためには、たくさんのお金が必要だったので。五郎兵衛は、親せきや知人に協力を求めました。しかし、当時としてはたいへん難しい工事だったので、だれ一人賛成してくれる人はいませんでした。その中には、

「北上川に橋をかけるんだって。頭が変になったんじゃないか。」

などとあざけり笑う人もいました。

そんなとき、五郎兵衛にかすかな光が差し込みました。石巻村本町の区長の田辺吉助が、北上川に橋をかけたいと県令（県知事）に願い出て許可されました。しかし、あまりにも資金がかかりすぎるために、橋作りに手をつけないでいることを知ったのです。すぐに五郎兵衛は、橋をかける権利をゆずってくれるようにお願いするために、田辺吉助の家に行きました。何度も足を運んだ五郎兵衛の思いが、決して田辺吉助の気持ちも動かし、ようやく橋をかけるための権利をゆずり受けることができました。

その後も、困難が続きました。橋をかける権利は何か手にしたものの、県令の許可がなかなかおりませんでした。その理由は、橋をかけようとする五郎兵衛に反対する人たちがいたからです。特に、渡し場の船頭たちは、自分の仕事が減ってしまうため、五郎兵衛の考えには賛成できなかったのです。それでも、五郎兵衛はくじけずに、反対する人を説得したり県令にねばり強く願い出たりしました。五郎兵衛は自分と同じ悲しみを味わった人がいるに違いない。そんな思いをする人が出ないようにするためにも、橋作りを進めなければならぬと考えていました。その思いが伝わったのか、明治十五（一八八二）年二月に、念願の橋作りの許可書を手にすることができました。

待ちに待った橋作りが始まりました。まず、川幅の最も狭い中瀬を利用して、中瀬の東側と西側に橋をかけることにしました。もちろん、五郎兵衛はこれまで以上に働き、資金をつくらにしました。それでも、資金は不足しました。私財を投げうって木材を用意しました。また、妻のせいが縄をなって売ったり工事現場で働く人の食事の世話をしたりして、資金の不足を補いました。それでも足りず、五郎兵衛は布団や家財も売りに出しました。冬の寒い最中に、布団の代わりにかやを着て寝るほど、自分たちの生活を切りつめていました。さらに追い討ちをかけたのが大雨による洪水でした。できかかった橋がこわされてしまいました。橋の材料にしていた木材がなんと河口を出て、沖にある田代島や網地島まで流されたこともありました。それでも、五郎兵衛は流された木材を回収し、少しでも材料を確保しようと努力しました。そうした五郎兵衛の姿を見ても、

「橋をかけたのなら、五郎兵衛が人柱になれ。」

「橋作りが成功したら、橋の上を逆立ちして歩いてやるぞ。」



かや：蚊を防ぐためにつり下げる、麻や木綿でできた布で寝床をおおうもの。

人柱：

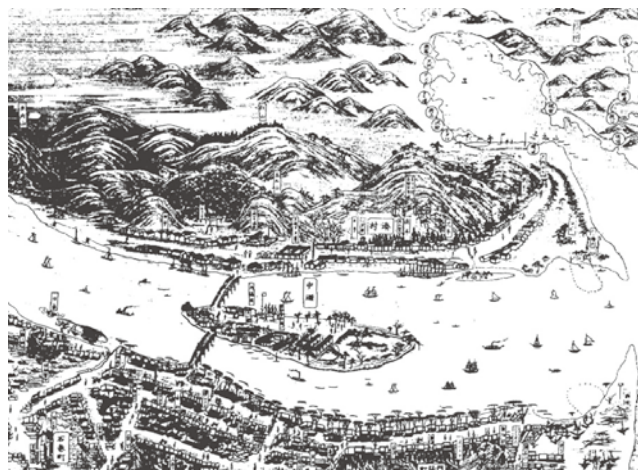
橋や城を造つたりするときに、神の心を和らげ、完成を期するためのいけにえとして生きていく人などを水中に沈めたり、地中のうめたりすること。

と、冷やかしたり馬鹿にしたりする人が絶えませんでした。しかし、五郎兵衛の気持ちはまったく変わりませんでした。それどころか、何とかして橋を作りたいという思いを強めていきました。

日に日に材木が組み合わされ、少しずつ橋の形になって行きました。工事を始めてから五か月後のこと、とうとう五郎兵衛の思いがかないました。五郎兵衛は、父が亡くなったときのことを忘れたことはありませんでした。

橋の完成式には、県令がわざわざ石巻村に足を運び、お祝いの言葉を述べました。県令は、五郎兵衛のりっぱな仕事をいつまでもたたえらるために、お祝いの席で橋の名前を「内海橋」と名づけました。そのほかにもたくさんの方が集まり、橋の完成を喜びました。その中には、工事中で五郎兵衛を冷やかした人たちもいました。しかし、もう五郎兵衛のことを批判する人はいませんでした。

このとき五郎兵衛は、すでに四十一歳になっていました。橋を作りたいと願った日から、十七年もの歳月が流れていました。



内海橋ができたころの石巻の様子 (石巻市図書館蔵)

内海五郎兵衛

内海五郎兵衛は、天保十二(二八四二)年、牡鹿郡水沼村(現在の石巻市)に生まれた。北上川の石巻一湊間に橋をかける計画を立てたが、渡し舟の船頭たちから反対されてしまう。しかし、自分の財産までも投げうち、苦勞の末に橋を完成させた。この橋は、その偉業をたたえられ「内海橋」と名づけられ、現在も多くの人々の生活を支えている。

五郎兵衛は、
渡波の内海家を烏
帽子親とする烏帽
子になり、その
後、内海という姓
を名乗るようにな
りました。

烏帽子親：
元服のとき、烏帽
子をかぶらせ、烏
帽子名をつける人。

烏帽子子：
烏帽子親から烏帽
子名をつけられた
者。